



抗菌印刷への
取り組み

研文社

株式会社研文社
尼崎工場 TEL : 06-6430-0603 <https://www.kenbunsha.jp>

環境にやさしい工場が基盤となって始まった「抗菌印刷」 マスクケース付きお便りでお客様をはげます

平成の一大ブームを生んだ小説『ハリーポッター』シリーズの製作・印刷で知られる株式会社研文社（網野勝彦社長）は、環境に配慮した活動の一環として抗菌印刷への取り組みを開始した。その皮切りとなったのが、コロナ禍の顧客企業をはげまそうと送ったマスクケース付きお見舞いメッセージづくりである。この取り組みは好評を得て、その後、オリジナル商品として発売するに至っている。抗菌印刷への取り組みを推進している同社生産管理課課長でプリンティングディレクターの三浦芳裕氏に話を伺った。

環境対応への取り組みがきっかけに

1946年に創業した研文社は、大阪に本社をおく「研文社」と、東京に本社をおく「東京研文社」が、創業70周年を迎えた2016年1月に合併し、現在の事業体となっている。2012年1月に竣工した尼崎工場は、事業改善や新たな取り組みに挑戦する同社のフラッグシップ工場であると同時に、社内最大の生産拠点でもある。

プリプレスに始まりプレス、ポストプレス、オンデマンド、配送に至るまで一

貫生産を実現するワンストップ工場という特長を持つ尼崎工場は、環境優良工場としても知られている。第18回印刷産業環境優良工場表彰の経済産業省賞商務情報政策局長賞など3度にわたり受賞。社内では小集団活動を中心に改善活動を続けることで、より良い工場運営を目指している。そうした環境印刷への取り組みが基盤となって始めることができたのが、LIMEX素材への抗菌印刷サービスだった。

環境に配慮した印刷物（環境印刷）への取り組みとして、同社では石灰石を原料とした素材「LIMEX」への印刷サービスを行っていた。そのLIMEXを活用した取り組みを、より拡充させるべく、何か新しいことが出来ないかと模索している時に社会を襲ったのが、新型コロナウイルス感染の拡大だった。コロナ禍により、社会は徐々に自粛へ向かっていき、顧客先企業も出社しない状況へ移っていった。しかし、製造拠点である同社の尼崎工場は稼働していた。そこで、社会に役立つ企業として何かできないかと動き始める。

社会全体が自粛し、外出もままならない、まさに“顔が見えない”状況の中、顧客先企業を印刷で元気づけられないかと考えたのが、コロナ禍が過ぎ



研文社 尼崎工場

去った時に配布する“お見舞いのお便り”づくりだった。

出来ることから始まった抗菌印刷

この“お見舞いのお便り”は、環境や衛生面に気遣ったものにしようと、LIMEX素材に抗菌印刷したマスクケースをつくり、そこにお便りを挟んで送ることになった。製作にあたっては、企画に賛同した山形県の大風印刷に協力をえて実現。東京の緊急事態宣言解除のタイミングを見込んで製造をスタートし、解除後に顧客先の担当者へ送付した。この企画は、好反応を得ることとなり、現在は同様のマスクケースは商品化されて、販売している。この取り組みは、コロナ禍という非常事態であっても、顧客に望まれているニーズがあり、その一つが抗菌印刷であることを認識するきっかけとなった。



網野勝彦社長



三浦芳裕氏

抗菌印刷を事業化するにあたり、改めて顧客先への情報収集をし、長年、抗菌印刷に取り組んでいる若武印刷や資材メーカーを訪ねて事業を展開する上でアドバイスも得ることができた。また工場内や協力先をふくめ、さまざまに検証し、問題なく製造できることも確認できた。

また検査機関にも直接、問い合わせたところ、現在の技術で菌が繁殖しない状態を印刷物で保てるのは、抗菌剤を使った抗菌印刷が最善であると指導も受けたこともあり、一般社団法人抗菌製品技術協議会への加盟を決断した。抗菌印刷へ取り組むことは、顧客先へ、どのように品質保証ができるのかのポイントであり、「何よりも自社で出来ることから取り組もう」という挑戦への気持ちが強かったという。

実際、「抗菌印刷」サービスを始めてみると、「やりたいことが様々にできました」と振り返る三浦氏。同社ではオフ輪工場もあり、雑誌も製造している。しかし、雑誌の場合、表紙だけが抗菌印刷されているのが一般的で、本文は輪転機によるとさらに難しくなる。こうした課題が浮上する中で、どこまで抗菌が必要なのかについても考えていく必要性が出てきている。「“安心”を届けることを前提とすれば、できる限り抗菌加工したいと思っています。



LIMEX素材に抗菌印刷をほどこしたマスクケースは商品化された。中身は二面式になっており、封筒入りで販売。

ただし今は、できる限りの最善策で取り組んでいるところです」と語る。抗菌加工により1色分のニス加工が増える分、コストや製造の負担があることから、すべてに行えるのかも課題となっている。そのため、今後も引き続き抗菌印刷で、どこまで・何が出来るのかについて、アイデアや工夫を出しながら挑戦し続けていきたいとしている。

社会に貢献できる企業として

「常に改善の意識だけは捨てずに取り組んでいきました」という三浦氏。抗菌印刷への取り組みは、社是にある“新しい技術に取り組もう”につながる活動になっている。

同社の新しいことへの挑戦は、研文社が培ってきた社風であり、「顧客先が望むことの半歩先のことに取り組もう」という合言葉があります。これまでも、新しいことを始めたタイミングでリーマンショックや東日本大震災に見舞われるなど経験してきました。それでも、新しいことに挑戦し続ける社風があったからこそ、従来型の事業にとらわれない新しい活動ができ、それにより他社よりも少し先の技術や事業に着手できてきたのだと思っています。また、そういう事業体であることにつ

いての自負もあります」と語る。

現在は、マスクケース以外にも、DMや封筒など、顧客の要望を受けたものへの抗菌印刷サービスも行っている。抗菌印刷は、他の印刷業務に比べれば小さな市場だ。それでも、急速にマスクケースを商品化する動きがある中で、SIAAマークを取得したことで、他社との差別化も可能になると期待を寄せる。「まだ力不足なので、伸びしろがあるのだろうと思っています」と述べる。

社会の役に立つ企業であり続けるために印刷会社として何が出来るのか。困り事を一緒に考え、解決してくれる企業でなければ、パートナーとして認められない。「社会に貢献し、お客様にとってパートナーとなれる印刷会社になっていきたいと思います」。

コロナ禍の後の世界は、戦後と同じように、何も無いところから復興していく姿に似ているのではないかと語る三浦氏。企業が生き残るためにどうするか、知恵を出し合っていくしかない。特に、これからの時代を担う若い世代が、顧客先の困りごとに積極的に取り組んでいける、新しいことにチャレンジできる土壌をさらに作っていきたくも言う。自社の生産環境を最大限に生かした取り組みが始まっている。